山口半六『大阪市新設市街設計説明書』の校合と解題(その1): 街路の設計

CONFIRMATION AND REVIEW OF THE “EXPLANATION OF THE PLAN FOR OSAKA” BY HANROKU YAMAGUCHI (PART 1) : STREET PLAN

木方十根 ——— * 1 木和田有美 ——— * 2
吉本晃城 ——— * 3 小山雄資 ——— * 4
中江 研 ——— * 5 中野茂夫 ——— * 6
出村嘉史 ——— * 7

Junne KIKATA ——— * 1 Yumi KIWADA ——— * 2
Kouki YOSHIMOTO ——— * 3 Yusuke KOYAMA ——— * 4
Ken NAKAE ——— * 5 Sigeo NAKANO ——— * 6
Yoshifumi DEMURA ——— * 7

キーワード:
山口半六, 大阪, 都市計画, 第一次市域拡張, 街路

Keywords:
Hanroku Yamaguchi, Ōsaka, City planning, 1st stage city area expansion, Street plan

Hanroku Yamaguchi's “Plan for Osaka” is known to be a pioneering example of Japanese planning. This is the first in a series of papers confirming the contents of the accompanying text to Yamaguchi's plan, “Explanation of the Plan for Osaka” by comparing two existing versions. Through close examination of the corrections made between versions, this study draws attention to city design topics that Yamaguchi was especially concerned about. Part one addresses the development of Yamaguchi's street plan, from the city authority's street design requirements, to the comprehensive consideration of city planning including other facilities and upgrading of the existing streets.

1. はじめに

山口半六(安政5・1858年~明治33・1900年)による大阪市新設市街設計(明治32・1899年)は、我が国最初期の都市計画案として知られ、山口についての古今の評伝¹⁾²⁾の他、都市計画史³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾、建築史⁸⁾の著作や近年の研究報告⁹⁾¹⁰⁾でも言及されている。その歴史的重要性は指摘されてきたものの、いずれも論の一部で触れる程度の概説や部分的論考に留まり、未だに実証的研究の余地が残されている^{注1)}。その一因として、本設計の内容を説明した『大阪市新設市街設計説明書』(以下『説明書』)のうち、公開されている東京大学史料編纂所・所蔵版^{注2)}が草稿であり、山口による校正や注記が付されていることに加え、かなりの部分の運筆が速く判読が容易でないなど、史料として取扱いが困難であることが考えられる(写真1)。

これに対し筆者らは、控として作られた別本を閲覧する機会を得た。控の存在も記録されていたが¹¹⁾¹²⁾、二冊を照合した詳細な検討は行われて来なかった。本編および続編では、以上二冊の『説明書』の校合により内容を確定し、全編を収録するとともに、既往研究を踏まえた若干の考察を加えることで、今後の幅広い研究の基礎とする。

2. 史料の概要

2.1 史料の寄贈と保管の経緯

昭和39(1964)年12月17日、野津礼子、山口弥六両氏より東京大学史料編纂所へ、①大阪新市街設計答申書及図書目録、②大阪新設市街設計説明書、③大阪市新設堀川・街路・公園早見、④『山口博士建築図集、以上四冊の史料が寄贈された^{注3)}。一方山口家には①②③の

「控」が保管された。本稿では主に②を取り扱い、以下、東大寄贈分を「原稿」、山口家保管分を「控」とする。

2.2 史料の成立経緯

明治31(1898)年6月24日の大阪市議会で確定した同年度追加予算の歳出項目に「第十五項 街路設計費」三千円が計上された^{注4)}。山口家保管の大阪市参事会からの「大阪市街路配置設計囑託書」(同7月9日)^{注5)}にも、設計完遂の上報酬金として同額を支給する旨が記されている。一方、同設計の答申の時期については、前節の史料①に明治32年3月27日と認められる^{注6)}。また大阪市発行の『大阪市新市街路設計全図』^{注7)}には明治32(1899)年5月発行とあり、①にみ

写真1 『大阪市新設市街設計説明書』(原稿)の表紙、冒頭、末部

写真2 『大阪市新設市街設計説明書』(控)の表紙、冒頭、末部

¹⁾ 鹿児島大学大学院理工学研究科 教授・博士(工学)
(〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-40)
²⁾ 鹿児島大学大学院理工学研究科 博士前期課程
³⁾ 鹿児島大学大学院理工学研究科 博士前期課程
⁴⁾ 鹿児島大学大学院理工学研究科 准教授・博士(社会学)
⁵⁾ 神戸大学大学院工学研究科 准教授・博士(工学)
⁶⁾ 大阪市立大学大学院生活科学研究科 教授・博士(都市・地域計画)
⁷⁾ 岐阜大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)

¹⁾ Prof., Graduate School of Science and Engineering, Kagoshima Univ., Ph.D.
²⁾ Graduate Student, Graduate School of Science and Engineering, Kagoshima Univ.
³⁾ Graduate Student, Graduate School of Science and Engineering, Kagoshima Univ.
⁴⁾ Assoc. Prof., Graduate School of Science and Engineering, Kagoshima Univ., Ph.D.
⁵⁾ Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Kobe Univ., Dr. Eng.
⁶⁾ Prof., Graduate School of Human Life Science, Osaka City Univ., Ph.D.
⁷⁾ Prof., Graduate School of Engineering, Gifu Univ., Ph.D.

る答申時期と整合する。以上のとおり明治 31 年度中の 7 月から 3 月までの設計囑託の成果物として提出されたのが本資料である。その表題および内容からみて、1)「草稿」「原稿」とある東大寄贈分、2) 目録①のとおり添付図一式とともに大阪市に提出された正本、3) 正本に基づく控、以上が、1) から 3) の順で執筆されたと推定される。

3. 『大阪市新設市街設計説明書』の構成と本稿での取扱い

3.1 本稿での記述内容の取扱い

本報告では、体裁の許す限り翻刻としての有用性を確保するため全文を掲載する。ただし紙幅の都合上、施設全号の個別解説は原本の内容に即した表にまとめ全文掲載する。記述内容は公開史料である「原稿」を軸に校合のうえ掲載し、「原稿」での赤字添削箇所はゴシック体と一重取消線、黒字添削箇所は<>と二重取消線で表示する。なお紙幅の制約から、段落変更を伴わず内容の展開がない改行箇所は「_」（＝半角アンダーバー）、本稿に反映出来なかった段落変更箇所は「_」（半角二重アンダーバー）、控に個有の記述および校正は[]内に斜体で表記し、必要に応じ、本文中および表中備考欄に注記する。

3.2 「索引」と報告各編の構成

「控」では表題に続く巻頭に、4 章冒頭のとおり索引が付く。一連の報告では第一編（本稿）で「壺」の街路、第二編で「貳」から「五」、即ち堀川・公園等、第三編で「六」町名番地、を取り扱う。

4. 『説明書』の内容 - 表題から「街路」まで

以下、本章では上記の取扱いに従い『説明書』の表紙から、「一、街路」までを本文および表 2、3 によって全文掲載する。

原稿 大阪市新設市街設計説明書

[控では「原稿」に代わり「控」と記載]

索引 符号	---	摘要
壺		街路
貳		堀川
参		公園
四		臨海停車場
五		一等街路位置変更
六		町名番地

[索引は原稿にはなく控にのみ掲載]

大阪市新設市街路設計説明書

大阪市ノ新編入地ニ新設スベキ街路ノ設計ヲ大阪市参事會ヨリ囑托セラレタルモ街路ヲ設計スルト同時ニ堀川ノ開鑿<通>、公園ノ新設モ亦必_要欠グベカラザルヲ認め茲ニ併セテ<之レカ>設計ヲ為シタリ_其必要トスル所ノ理由ハ以下各項目ニ就テ之ヲ記ス_ベシ

一 街路ノ配置（自第一号 至第十号 図参看）

街路ヲ配置スルニハ住民ノ營業其他日常生活上ノ_利害便否固ヨリ考察ヲ要スベキ事項ニ属スト 雖_交通ノ便如何ヲ講スルヨリ大且急ナルハナシ凡ソ交通ニハ自_カラ集点アリ例ヘハ瀛車ノ停車場瀛船ノ發着場_ニ於ケルカ如キ是ナリ而シテ此集点ニ最モ近ク且ツ容易ニ_達シ得ラレ若クハ集点ト集点トカ常ニ最短距離ヲ_以テ互ヒニ連絡セラル_ヨリ交通ニ便ナルハナシ故ニ本設計_ニハ該距離カ最モ近カルベキ方針ヲ採リ以テ新街路ヲ_配置シ之ヲ幹線街路トシ特ニ其幅員ヲ廣フセリ

従来大都市ノ街路ハ東西南北ノ方位ニ由ツテ区画セラレ_今ヤ市民

ハ東側西側若クハ南側北側ヲ称スルニ習ヘリ_是ヲ以テ新街路モ亦タ前記幹線一ニヲ除ク外概ネ東_西南北ノ方位ニ由リ之ヲ配置ス蓋シ人ヲシテ知リ易カラシメ_惑ハザラシメン_ヲ期セシナリ然レ其地勢ニ甚シキ高低アル_カ又ハ障害等ノ為メ方角ニ由リ難キ場合アルニ當ツテハ_唯最多ノ便利ヲ謀ルノミ[ノミヲ謀ル]ヲ目的トシ之ガ配置ヲ為シタル_例モ復タ 鮮シトセズ

街路相互ノ距離ハ近キニ失スレハ其数ヲ増シテ市ノ負擔_ヲ大ナラシメ遠キニ過グレハ交通ノ不便ヲ來ス今旧市街ノ_区画ヲ按スルニ縦横共ニ略五十間内外ニ過キズ然レドモ民_度ノ進歩ニ伴ヒ将来建物ノ規模 益 廣大ナルベキヲ以テ_此区画ハ年一年必ス狹隘ヲ感スルニ至ルベシ故ニ本設計ヲ_為スニハ欧米各市ノ例ヲ参酌シ縦凡ソ貳百間横凡ソ百_間ヲ標準トセリ然ルトキハ当今稍ヤ街路相互ノ距離遠キ_ニ過グルノ嫌ヒナキニシモアラズト雖此ノ如キ場合ニハ適宜ノ場所_ニ裏道又ハ小路ヲ設クルヲ宜シトス又今既ニ市街ヲ形造_レル所ニ在ツテハ在来ノ街路ヲ以テ直チニ裏道、小路トスルモ_可ナルベシ而シテ裏道ハ頗ル多数ニシテ之ヲカ配置ヲ為_ストキハ徒ラニ煩雜ニ渉ルガユヘ茲ニ只其方針ノミヲ示スニ止_ム_例ヘハ西区川南北区川北ノ如キ 渺 漠タル地ニ在ツテハ障害_少ナキ為メ略<縦>二百間横百間ノ準ヲ以テ街路ノ設計ヲ為_シ得タリト雖旧市ニ接續セル北区川崎北野南区難波ノ_如キ既ニ市街ノ形状ヲ備ヘ軒檐相連ル場所ニ在ツテハ種_々ノ障害ニ撞着シテ單純ナル標準ニ拠ルヲ得ザル_ヲ往々_之レアルガ故ニ其大体ニ於テ百間ヨリ二百間ノ巨萬ヲ以テ仮リ_ニ街路ヲ配置シ其最寄ニ利用シ得ベキ旧街路アルヤ否_ヤヲ考ヘ若シ之レアルトキハ之ヲ利用シ然ラザレバ民有地ヲ貫_通シテ出来得ル限り東西南北ノ方位ニ從ヒ以テ新街路ヲ設ケタリ

旧街路ハ幅員不十分ナルカユヘ之ヲ利用スルトキハ常ニ總テ擴_張セザルベカラズ然ラハ新街路ヲ設ルニ旧街路ヲ利用スルモ_民有地ヲ利用<貫通>スルモ共ニ土地買収ヲ要スルカ故ニ地價不廉_ノ土地ニ對シ新街路ヲ設ケントスルハ經濟上容易ノ業ニアラ_ズ是ヲ以テ可及的之ヲ避ケタリ_旧街路ヲ利用スルニハ其片側ニ向ツテ擴張スルヲ務メ土地ノ_買収ニ際シ影響ヲ被ムルベキ個人ガ少数ニ止マランヲ_期セリ_普通民家ノ一部分ノ如キハ敢テ買収シ難カラザレドモ廣大ナル建築物乃チ各種ノ工場等ニ至テハ其一隅ヲ欠グモ全体_ノ營業ニ影響ヲ及ホスヲアリ為メニ其買収費用巨額ヲ_要スベク又寺院墓地ノ如キモ特殊ノ事状アリテ移轉ニ困_難ヲ告グ依テ可成的此種ニ属スル建物ニ触ル_ヲ避ケタリ

一 街路ノ幅員

大阪市在来ノ街路ハ幅員最モ廣キ所四間三分ニ過キ_ズ今ヤ民度日ヲ逐フテ進歩シ人馬車輛ノ交通其他貨_物ノ運搬等益多キヲ加ヘ業ニ既ニ狹隘ヲ告グ然リト雖今_俄カニ欧米大都府ノ例ニ倣ヒ三四十間ノ大街路ヲ應用ス_ルニモ及バザルベシ如何トナレハ我邦ニ於テハ震災多キ為メ彼_地ノ如ク五六階以上ノ大廈高樓ヲ建築スルヲ稀ナレバナリ殊_ニ大街路ハ市ノ負擔モ亦タ随ツテ莫大ナルガユヘ彼レレ_ヲ参酌シ以テ適度ノ幅員ヲ定ムルヲ左ノ如シ

街路等級及幅員内訳表（第十一号図参看）			
街路等級	街路総巾	車道	
壹等	九十尺（十五間）	五十四尺（ 鐵道敷巾 十五尺五寸 諸車道巾 卅八尺五寸	右側 十八尺 左側 十八尺
貳等	六十尺（十間）	四十尺（ 鐵道敷巾 十五尺五寸 諸車道巾 廿四尺五寸	右側 十尺 左側 十尺
参等	五十一尺（八間半）	卅四尺（ 鐵道敷巾 十五尺五寸 諸車道巾 十八尺五寸	右側 八尺五寸 左側 八尺五寸
四等	卅九尺（六間半）	廿七尺（ 鐵道敷巾 十五尺五寸 諸車道巾 十九尺二寸五分	右側 六尺 左側 六尺

街路等級及幅員内訳表（第十一号図参看）			
街路等級	街路総巾	車道	人道
五等	卅尺（五間）	廿尺（鉄道ナシ）	右側 五尺 左側 五尺
六等	廿五尺八寸（四間三分）	十七尺八寸（鉄道ナシ）	右側 四尺 左側 四尺
七等	十九尺八寸（三間三分）	十五尺八寸（鉄道ナシ）	右側 二尺 左側 二尺

一二三等ハ何レモ幹線街路トス

一等街路人道十八尺ノ内八尺ハ植木ヲ為スベキ場所トス

四等街路中鉄道避線ノ場所ニ於テハ該車道巾十一尺五寸トナル

七等街路ハ今ノ市中ニ現在セルモノニシテ本設計ニハ属セザレドモ裏道ニ限り應用セリ依テ便宜ノ為メ之ヲ掲グ

惟フニ當市ノ将来ハ日ニ月ニ繁榮ノ域ニ進ミ交通益頻繁ヲ訴フルヤ必セリ是ヲ以テ新設街路ハ各等通シテ人道車道ノ區別ヲ設ケ又電氣鉄道馬車鉄道ハ交通ノ利器トシテ日ナラズ其用ヲ感ズベキヲ以テ一、二、三等（乃チ幹線）街路ニハ此種ノ複線鉄道ヲ四等ニハ單線鉄道ヲ設ケ得ラルベキ餘祐ヲ見込ミ置キタリ其五等已下ニ属スルモノハ鉄道ヲ設ケザルコトセリ

市街ノ風致ヲ増シ公衆ノ衛生ヲ補ハシカニ為メ一等街路ニハ樹木ヲ植ヘ並木トス然レ共車道ニ植レハ交通ヲ妨ゲ人道ハ復タ敷石等ヲナスガ為メ播殖ニ適セズ依テ別ニ之ヲ植ユベキ場所ヲ設ケタリ（第十一号図参看）二等街路已下ハ幅員ニ於テ餘地少ナキヲ以テ植樹セザルコトス

街路ノ交叉点ハ車馬ノ衝突其他雜沓ヲ極ムルヲ常トス故ニ交叉点ニ於テハ四ツ角ヲ切リテ（第十二号図参看）其角度ヲ緩メ以テ街路ノ面積ヲ廣フセリ斯クスレハ危険ト雜沓トノ患少ナキノミナラズ電氣、馬車鉄道等ヲ屈曲セシムルニモ大ニ便ナリ

一 街路ノ地場

新街路中卑湿ノ地ハ地場揚ヲ為スベシ其盛土ノ高サハ近傍堀川又ハ川ニ於ケル満潮水面ヨリ四尺已上タルベク且ツ地勢ニ鑑ミ一区域又ハ一街路毎ニ適度ノ標準ヲ立ツルヲ要ス

上ニ既ニ記スルカ如ク街路ハ交通ノ便ヲ主トシ相連絡セザレハ其用ヲ全フスル能ハザルモノトス故ニ新編入地ノ街路ヲ設計スルト同時ニ旧市街路ノ改修又ハ新設セザルベカザルモノ數線ニ對シテモ之ガ設計ヲ為シタリ抑モ旧市ノ街路ニ手ヲ觸レシカ其改修ヲ要スルモノノ千百ニシテ止マラズ誰レカ一朝ニシテ能ク及ブコト得シヤ今此設計中ニ於テ茲ニ改修ヲ設計セル旧セントスル旧市ノ街路タルギ街路中[其]ノ大半即第五十一号線、第七十八号線、第三百七十七号線第百八十二号線第六十一号線第三百三十二号線等ハ新編入地ノ街路設計ノ有無ニ拘ハラズ大阪全市ノ街路計畫上恰モ貫通幹線ニ適當ナル位置ニ在リテ其大部分タル市有濱地ニ係リ土地買収ニ要スベキ勞費モ割合ニ僅少ナレハ之ガ改修新設ヲ断行スルニ至難ト謂ベカラズ若夫レ此改修新設ヲ行ハザランカ新編入地ノ街路モ亦大ニ交通ノ便ヲ減殺セラルトフ奈何セン然ラハ則此數線ノ事タル目下ノ急務ニ属シ而カモ従来市ニ一貫通幹線ナキノ不便ヲ永遠ニ改良セザルハ市ノ面目体裁其他何レノ点ヨリ論スルモ策ノ得タルモノニアラザルヤ明ケシ要スルニ本設計ハ新編入地街路ノミニテ足レリト雖特ニ之レガ設計ヲ為シタル旧街路ニ[モ]及ボシタル所以ノモノハ實ニ以上ノ理由存スルヲ以テナリ当局諸士幸ニ微志ノ

アル所ヲ採納シ之レガ断行ニ務メラレンコトヲ敢テ茲ニ附言ス

一 街路ノ各線

此項ニ於テハ街路各線ノ等級經過地併其目的方法ヲ記載ス街路各線ノ説明ヲ便ナラシムル為メ左ノ例ニ依リ線名及番号ヲ付ス

一 街路ノ東ヨリ西ニ通スルモノ又ハ是ヨリ四十五度以下ノ角度ヲ為スモノヲ東西線ト名ク

一 北ヨリ南ニ通スルモノ又ハ是ヨリ四十五度以下ノ角度ヲ為スモノヲ南北線ト称ス

一 街路ニ番号ヲ付スルハ等級ニ由ラズ線ノ順序ニ抛ル

一 番号ハヲ付スルニハ東西線ヲ先ニシ南北線ヲ後ニス

一 番号順ハ淀川以北ヨリシテ以南ニ至ル

一 東西線ノ番号ヲ付スルハ北ナルモノヨリ數ヘテ南ニ至リ東ナルモノヨリ始メテ西ニ終ル

一 南北線ノ番号ヲ付スルハ東ナルモノヨリ數ヘテ西ニ至リ北ナルモノヨリ始メテ南ニ終ル

街路各線説明ノ順序ハ便宜ノ為メ番号順ヲ追ハズ等級別ニ従フ然レトモ同一ノ等級内ニ在ツテハ番号順ヲ以テス

一等街路

東西線

第十六号線

經過地

梅田停車場ノ前ニ起リ日本郵船會社大阪支店ノ前ヲ經過シ出入橋ノ所ニテ堀川ヲ渡リ大阪市立商業学校ノ北第一尋常中学校ノ北日本紡績會社ノ南ヲ經過シ舟津橋ヲ渡リ端建藏橋ニ至ル

目的及方法

本線ハ第七十五号線（一等）ト連絡シ交通ノ集点トシテ第一位タル梅田停車場ヨリ築港埠頭大棧橋ニ通スル幹線街路ノ一部トス出入橋以西ノ曾根崎川ノ全部及耕作橋以西ノ堂島川ノ北涯ヲ埋立其北岸ニ沿フタル民有地ト共ニ現在ノ福島街路ニ合併ス

舟船津橋端建藏橋ハ圖面ノ如ク其位置ヲ改メ之ヲ改築シテ一等街路相当ノ幅員トス

民有地ヲ街路ノ敷地トスレハ買収ヲ要スルハ固ヨリ論ナシ既ニ載セテ大体ノ説明書中ニモ在リ故ニ以下各線トモ新設ノ方法ニ於テ單ニ買収ニ止マルモノハ之ヲ記セズ其反對ノ場合即チ買収ヲ要セザルモノニ就キ特ニ記載スルコトセリ

[以上、最初の号線のみ本文に例示。以降は表 2、3 に掲載]

5. まとめ

5.1 「原稿」と「控」の関係

「原稿」での校正は、ほぼ正確に「控」に反映されている。従って未見である正本の内容もこれらと同様と推定され、本稿で掲載した原稿校正後の内容が『説明書』の確定的内容と判断しうる。

「原稿」の校正で最も重要な点は、表題の変更に端的なように「街路設計」から「市街設計」へと設計対象を拡大し、堀川、公園、臨海停車場、そして旧市街路の改修を含めたことである^{注8)}。個別街路の説明でも一般名詞の「掘割」から「新設堀川」への表現修正や新設堀川との関係の追記（以上計 16 箇所）、あるいは一部幹線街路の目的中「旧市街路ノ改修ニ属スルモノニシテ所謂貫通幹線」との

表 2 街路ノ各線（一等～四等街路・東西線）

等級	方位	(号)	経過地	目的及方法	(備考)
一等街路	東西線	第十六号線	梅田停車場ノ前ニ起リ日本郵船會社大阪支店ノ前ヲ経過シ出入橋ノ所ニテ堀川ヲ渡リ大阪市立商業学校ノ北第一尋常中学校ノ北日本紡績會社ノ南ヲ経過シ舟津橋ヲ渡リ端建藏橋ニ至ル	本線ハ 第七十五号線（一等） ト連絡シ交通ノ集點トシテ第一位タル梅田停車場ヨリ、築港埠頭大棧橋ニ通スル幹線街路ニ一部トス。出入橋以西ノ曾根崎川ノ全部及耕作橋以西ノ堂島川ノ北涯ヲ埋立其北岸ニ沿フタル民有地ト共ニ現在ハ福、島街路ニ合併シ、舟船津橋端建藏橋ハ図面ノ如ク其位置ヲ改メ之ヲ改築シテ等街路相当ノ幅員トス *民有地ヲ街路ノ敷地トスレバ買収ヲ要スルハ固ヨリ論ナシ、既ニ載セテ大体ノ説明書中ニモ在リ故ニ以下各線トモ、新設ノ方法ニ於テ単ニ買収ニ止マルモノハ之ヲ記セズ其反、對ノ場合即チ買収ヲ要セザルモノニ就キ特ニ記載スルヲトセリ	*以降 字下げ
		第七十五号線	端建藏橋ニ起リ外國人居留地ノ東演梅本町尻、無川ノ常盤橋西詰ノ一ツ西ノ辻花園橋西詰ノ一ツ西ノヲテ経過シ新架橋ニ依リテ運河會社堀川新設堀川第四号全十六号全五号全六号ヲ渡リ築港埠頭大棧橋ニ至ル	本線ハ第十六号線ノ西端ヲ承ケ築港埠頭大棧橋ニ至ル幹線街路トス、居留地ノ東演及尻無川ノ西岸ニ於ケル民有地ノ一部分ト端建藏橋ヨリ大渉橋ノ間ニ於ケル木津川西、涯ヲ埋立タル一部分トヲ現在ノ街路ニ合併ス	
二等街路	東西線	第十五号線	梅田日本郵船會社大阪支店ノ南ニ起リ西成郡、役所ノ南日本紡績會社ノ西北隅津津製油會社ノ南ヲ経過シ新架橋ニ依リテ逆川ヲ渡リ安、治川北通二丁目ニ至ル	本線ハ 第十五号線第廿六号線 ト連絡シ交通ノ点梅田停車場ヨリ安治川北岸ノドックニ通スル幹線街路ニ一部トス	
		第廿五号線（一部）	西九条ニ於テ第十五号線ト交叉ノ点ヨリ東リ朝、日橋ニ至ル、十五号線ニ東ハ六等街路ニ属ス	本線ハ 第十五号線第廿六号線 ト連絡シ交通ノ点梅田停車場ヨリ安治川北岸ノドックニ通スル幹線街路ニ一部トス	
		第廿六号線	朝日橋ニ起リ四寶島、春日出、島屋新田ヲ経、過シ安治川北岸ノドックニ至ル	第廿五号線ノ連絡線ニシテ安治川北岸ノドックニ、至ル幹線街路トス	
		第五十一号線	大阪鐵道城東線ノ曙橋畔街道路切ニ起リ真田、山ノ北ヲ経過シ空堀橋内安堂寺町筋ノ中間ヲ、貫通シテ東横堀川末吉橋ヲ渡リ長堀川ノ北岸、ニ沿フテ高橋北詰ノ西ニ於テ新架橋ニ依リ木津川ヲ渡リ第七十八号線（二等）ノ東端ニ至ル	主道最寄一帯ノ地ハ師團所在地及大阪鉄道、主道停車場ノアル所ニシテ本線ハ第七十八号線（二等）第七十五号線（一等）ニ連絡シ此集點ヨリ築港埠頭大棧橋ニ通スル幹線街路ニ一部トス、末吉橋以西ハ長堀川ノ市有濱地ヲ利用シ長堀、西端ニ於テ木津川上ニ一、大架橋ヲ為スモノトス、本線ハ即チ大体ノ説明中ニ在ル旧市街路ノ改修ニ属スルモノトシテノ所、讀貫通幹線ノ一ツナリ	
		第五十六号線	大阪鐵道城東線桃山停車場ニ起リ昆沙門池ノ北東成郡役所ノ南ヲ経過シ新架橋ニヨリテ高、津入堀川ヲ渡リ日本橋筋ト交叉シ難波藏ノ南ヲ経過シ鮫川ノ北岸ニ沿ヒ摂津紡績會社ノ南ニ、出テ市木置場町ヲ貫通シ新架橋ニテ木津川ヲ渡リ、難波島ヲ貫キ新架橋ニテ木津川支流ヲ渡リ大阪、紡績會社ノ前ニ至ル	本線ハ第九十号線（二等）第七十五号（一等）ト連絡シ大阪鉄道桃山停車場及天王寺付近一帯ノ集點、点ヨリ築港埠頭大棧橋ニ通スル幹線街路ニ一部トス、下寺町ト交叉点ヨリ以東ニ於テ大ニ地面ノ切下[ゲ]ヲ為シ市材木置場町ノ所ニテハ木津川上ニ一、大架橋ヲ為スモノトス	控は[] 内なし
		第七十六号線	端建藏橋ニ起リ居留地ノ北濱古川ノ南岸本町町通、三丁目安治川市東南通ノ南ヲ経新架橋ニ依リ運河會社堀川新設堀川第十六号全(同)第四号全五号全六号ヲ渡リ大阪セメント會社及アルカリ會社中央セメント會社等ノ南ヲ経過シ築港埠頭大棧橋ニ至ル	富島安治川南岸ノ集點ヨリ築港埠頭大棧橋ニ至ル幹線街路トス但南安治川南岸南通ヨリ築港最、寄ニ至ル一帯ノ地ハ将来製鉄工業、造船事業、其他各種ノ製造業勃興スベキ場所ナルヲ以テ本線ハ即チ是、レヨリ旧市及梅田停車場ニモ至ルベキ街路ナリトス	
		第七十八号線	松島橋ノ南ニ於テ第五十一号線（二等）ノ西端木津川ノ西岸上ノ新架橋ニ起リ正西ニ向ヒ、新架橋ニヨリ至尻無川常盤橋ヲ渡リ第七十五号線（一等）ニ至ル	本線ハ第五十一号線（二等）ノ西端ヲ承ケ新架橋ニ至ル、第七十五号（一等）ニ連絡スルシテ築港埠頭大棧橋ニ至ルベキ幹線街路トス、第盤橋ハ図面ノ如ク位置ヲ改メ之ヲ改築スルモノトス、本線ハ即チ大体ノ説明中ニ在ル旧市街路ノ改修ニ属スルモノトシテ所謂貫通幹線ノ一ツナリ	
		第七十九号線	尻無川常盤橋ノ北ニ於テ第七十五号線（一等）第七十八号線（二等）ノ交叉点ニ起リ正西ニ向ヒ第七十六号線（二等）ニ至ル	第七十八号線（二等）ノ西端ヲ承ケ安治川南岸ニ至ルヲ経テ、築港埠頭大棧橋ニ通スル幹線街路ニ一部トス	
		第八十三号線	岩崎火葬場ノ東北ニ於テ第六十一号線（三等）ノ西端木津川上新架橋ノ西岸ニ起リ正、西ニ向ヒ新架橋ニヨリ尻無川ヲ渡リ第七十五号線（一等）ニ至ル	本線ハ第六十一号線（三等）ノ西端ヲ承ケ新架橋ノ所ニ至ル第七十五号線（一等）ニ連絡シテ築港埠頭大棧橋ニ至ルベキ幹線街路トス	
		第九十号線	三軒家大阪紡績會社ノ前ニ於テ第五十六号線（二等）木津川支流新架橋ノ処ノ西端大阪紡績會社ノ前ニ起リ同會社ノ南ニ沿ヒテ同會社ノ西南隅ニ至リ屈折シテ第百八十六号線（五等）ニ至リ夫レヨリ正西ニ向ヒ新架橋ニテ尻無川及新設堀川第十五号全十六号第七十五号線（一等）ト交叉シテ渡リ第七十五号線（一等）ト交叉シ第七十六号線（二等）ニ至ル	第五十六号線ノ西端ヲ承ケ築港埠頭大棧橋、安治川ノ南岸ニ至ル幹線街路トス	
	南北線	第百三十七号線	梅田新築停車場前ニ起リ大阪歌舞伎ノ東ヲ経過シ新架橋ニヨリテ曾根崎川ヲ渡リ堂島ヲ貫通シ新架橋ニテ堂島川ヲ渡リ中ノ島郵便局ノ東ヲ経過シ新架橋ニテ土佐堀川ヲ渡リ西横堀川西岸ニ沿ヒ新架橋ニテ、道頓堀川ヲ渡リ大阪鐵道淡町停車場前ニ至ル	交通ノ集點梅田停車場ヨリ大阪鐵道淡町停車場及難波字木津一帶ノ地ニ至ル幹線街路トス、西横堀川西岸ハ市有濱地ヲ利用シ堂島川、土佐堀川、道頓堀川ニ架橋ヲ為スモノトス、本線ハ即チ大体ノ説明中ニ在ル旧市街路ノ改修ニ属スルモノトシテ所謂貫通幹線ノ一ツナリ	
		第百三十九号線	紫川村字大仁ノ郡界ニ起リ正南ニ向ヒ西成郡役所ノ西ヲ経過シ福島浄正橋ノ処ニテ第百八十二号線（二等）ノ北端ニ至ル	郡界ヨリ第百八十二号線（二等）ノ北端ニ至ルヲ接シテ以テ北ニ至ルベキ幹線街路トス	
		第百八十二号線	福島浄正橋ニ起リ玉江橋常橋ヲ渡リ夫レヨリ、屈折シテ大目橋ニ至リ全橋ヲ渡リ兩國橋ニ至リ全橋、ヨリ旧道ヲ経テ白髮橋ヲ経過シ幸橋沙見橋ノ中、間ニ於テ新架橋ニ依リテ道頓堀川ヲ渡リ南リシテ西濱、町ヲ貫キ郡界ニ至ル	本線ハ第十六号線（一等）ト連絡シ西濱町堀江一帯ノ地ヨリ交通ノ集點梅田停車場ニ至ル幹線街路トス、兩國橋ヨリ以南下ノ橋間橋ニ通シ陸奥堀ノ丁ヲ、経過シ穴吹屋橋白髮橋ニ通スル旧街路ヲ利用、本線ハ即チ大体ノ説明中ニ在ル旧市街路ノ改修ニ属スルモノトシテ所謂貫通幹線ノ一ツナリ	
		第百九十二号線	安治川南通二丁目ニ於テ安治川ノ南岸ニ起リ、正南ニ向ヒ新架橋ニヨリ運河會社堀川、尻無川、及新設堀川第四号全五号全七号全八号ヲ渡リ木津川ノ北岸ニ至ル	安治川南岸一帯ノ地ヨリ川南々部一帯ノ地ニ至ル幹線街路トス	
		第百九十五号線	安治川南通三丁目ニ於テ安治川ノ南岸ニ起リ、正南ニ向ヒ新架橋ニヨリ新設堀川第四号全五号全七号及尻無川ヲ渡リ臨海停車場ノ北ニ於テ第百一十号線（三等）ニ至ル	安治川南岸一帯ノ地ヨリ臨海停車場ニ至ル幹線街路トス	
		第四号線	櫻並木ノ郡界ニ起リ正面向ヒ櫻ノ宮神社ノ北ヲ、経過シ淀川源八渡シテ下流新架橋ノ所ニ至ル	本線ハ第十号線ト連絡シ、都島東成野田網島一帯ノ地ヨリ交通ノ集點梅田停車場ニ通スル幹線街路ニ一部トス、源八渡ノ下流ニ於テ淀川上ニ一、大架橋ヲ為スモノトス	
東西線	東西線	第十号線	淀川源八渡シテ下流新架橋ノ所ニ起リ三井會社、所有製煉所工場ノ北ヲ貫通シ天満興力町及、末廣町ヲ経テ大阪府監獄署ノ南、北野太歳寺ノ南、寺町寒山寺ノ北ヲ経過シ梅田停車場前ニ至ル	第四号線ノ西端ヲ承ケ天満一帯ノ地ヨリ交通ノ集點梅田停車場ニ至ル幹線街路トス	
		第廿七号線（一部）	松津橋北詰ニ起リ正西ニシテ第廿四号線ニ接ス、廿四号線以西ハ六等街路ニ属ス	本線ハ第廿四号線ト第廿六号線（二等）ト連絡シ、下福島一帯ノ地ヨリ安治川北岸ノドックニ通ズル幹線街路ニ一部トス	
		第廿四号線（一部）	第廿一号線ノ西部ニ起リ新架橋ニヨリテ逆川ヲ、渡リ第廿五号線（二等）ニ接ス、廿五号線以西ハ六等街路ニ属ス	第廿七号線ノ西端部ヲ承ケ第廿六号線（二等）ニ連絡シ安治川北岸ノドックニ至ル幹線街路ニ一部トス	
		第廿七号線	第廿六号線（二等）ニ起リ第百四十九号線（三等）ニ至ル	交通ノ集點梅田停車場ヨリ正蓮寺川ノ北岸ニ至ル幹線街路トス	
		第六十一号線	高津神社ノ西ニ於テ第百三十二号線（三等）ニ起リ、道頓堀川ノ北岸ニ沿ヒ木津川ト道頓堀川ノ合、流点ノ北ニ於テ新架橋ニヨリテ木津川ヲ渡リ第八十三、号線（二等）ノ東端ニ至ル	本線ハ第五十三号線（四等）第百三十二号線（三等）第八十三号線（二等）七十五号線（一等）ト連絡シ、桃山高津、島ノ内道頓堀一帯ノ地ヨリ築港埠頭大棧橋ニ通スル幹線街路ニ一部トス、道頓堀川北岸ノ市有濱地ヲ利用シ、道頓堀川ト本、津川ト合流点ノ北方ニハ一、大架橋ヲ為スモノトス、本線ハ即チ大体ノ説明中ニ在ル旧市街路ノ改修ニ属スルモノトシテ所謂貫通幹線ノ一ツナリ	
		第六十二号線	南海鐵道難波停車場前ニ起リ難波入堀川ノ東端通リ岸ニ至リ屈折シ濱通、一部ヲ経テ全難波、大堀川ヲ新架橋ニ依テ渡リ第百八十四号線（三等）ノ南端ニ至ル	本線ハ第百八十四号線（三等）ト第百三十七号線（二等）ト連絡シ、南海鐵道停車場ヨリ梅田停車場ニ通スル幹線街路ニ一部トス	
		第九十五号線	三軒家船堀場ノ西岸ニ起リ正西ニ向ヒ新架橋ニ依リテ新設堀川第十五号全六号及尻無川ヲ渡リ築港埠頭大棧橋ニ至ル	第百九十二号（二等）第百号（三等）ニ連絡シテ紀州街道天下茶屋ヨリ築港埠頭大棧橋ニ至ル幹線街路トス	
		第百号線	船堀場ノ南ニ於テ木津川ノ西岸ニ起リ臨海停車場ノ東北隅ニ於テ第九十二号線（二等）ニ至ル	本線ハ第百九十二号線（二等）第九十五号線（三等）ト連絡シ、紀州街道天下茶屋ヨリ臨海停車場及築港、埠頭大棧橋ニ通スル幹線街路ニ一部トス、本線ノ東端木津川上ニ於テハ築港用ノ鉄道線ト併用シ得ラハベキ一、大橋ヲ架設スルモノトス此橋ノ一部分ハ帆船通過ノ為メ回轉スベキ構造トスベシ此橋ニ起リ北ハ西濱町ニ於ケル、第百八十二号線（二等）ノ南端ニ起リ南ハ紀州街道天下茶屋ニ通スル道路ヲ、開通スベキモノトス（第一号図參看）	
		第百〇七号線	臨海停車場ノ東北隅ニ於テ第百九十二号線（二等）ニ起リ臨海停車場ノ北側ニ沿ヒ第二十二、二、号線（三等）ニ至ル	本線ハ幹線ノ位置ニ不適当ナルヲ築港用地ト民有地トノ界ニ當ハルヲ以テ幹線ニアラザルモ三等街路ニ準シテ[其幅員ヲ廣クセム]第、百〇參号線第二百二十二号線亦タ之ニ全ジ	控[]内 取消線
		第百參号線	臨海停車場ノ東南隅ニ於テ第百九十二号線（二等）ニ起リ臨海停車場ノ南側ニ沿ヒ第二百二十二号線（三等）ニ至ル	第百〇七号線ノ記事ニ全ジ	
三等街路	南北線	第百廿八号線	櫻ノ宮神社ノ北手ニ於テ第四号線（三等）ニ起リ、関西鐵道會社網島停車場大長寺前ヲ経、過シ鮫川ノ北岸ニ沿ヒ備前島橋ニ至ル	関西鐵道網島停車場ヨリ[方]ハ旧市ニ連シ[方]ハ第四号線第十号線ト連絡シム、[并]并長梅田停車場ニ至ル幹線街路トス	控は[] 内なし
		第百三十二号線	豊崎村字本莊東門ノ郡界ニ起リ正南ニ向ヒ天、神橋筋四丁目ノ北端ニ至リ、天神橋松屋町筋ヲ経テ天王寺逢坂下ヨリ郡界ニ至ル	天満川崎一帯ノ地ヨリ高津又ハ天王寺一帯ノ地ニ至ル幹線街路トス、天神橋筋ニ於テハ全筋四丁目北端ヨリ天神島筋、マデハ東側全所ヨリ天神橋北詰マデハ兩側ヲ松屋、町筋ニ於テハ内安岡寺町以南通阪マデ西側ヲ擴張、ス天神橋筋詰内安堂寺町間ハ東測セザレバ其幅員ヲ何ヒニ擴張スベキヤ判然セズ、本線ハ即チ大体ノ説明中ニ在ル旧市街路ノ改修ニ属スルモノトシテ所謂貫通幹線ノ一ツナリ	
		第百四十九号線	正蓮寺川軍用橋ニ起リ正南ニ向ヒ西成鐵道線ト、交叉シ安治川北岸ニ至ル	第百九十五号線ノ南端ヲ承ケ正蓮寺川北岸ノ地、ヨリ安治川ノ北岸并ニ西成鐵道安治川停車場最寄ニ至ル幹線街路トス	
		第百五十号線	正蓮寺川軍用橋ニ起リ第三十号線（四等）ノ東端ニ至ル	第三十号線ノ東端ヲ承ケ第百四十九号線（三等）ニ連絡シ正蓮寺川ノ北岸ヨリ、安治川北岸并ニ西成鐵道安治川口停車場ニ通スル幹線街路ニ一部トス	
		第百七十九号線	道頓堀川新成橋ニ起リ南ニ向ヒ旧道街路ヲ経其南端ヨリ難波入堀川南ノ新架橋ニ至リ夫レヨリ難波鉄眼寺ノ東ヲ経過シ仁福神社ノ東北ニ於テ市立聖保院ノ西ヲ通スル、神道ニ至リ全通旧街路ヲ経堀川北ニ至リ新架橋ニテ堀川ヲ渡リ、朝日紡績會社ノ西ヲ経過シ郡界ニ至ル	旧市ヨリ難波木津一帯ノ地ニ至ル幹線街路トス	
		第百八十四号線	難波入堀川南ノ新架橋ヲ於テ第六十二号線（二等）ノ西端ニ起リ難波入堀川ノ西岸ニ沿ヒ大阪鐵、道淡町停車場前ニ至ル	第六十二号線（三等）ノ西端ヲ承ケ第百三十七号線（二等）ニ連絡シ南海鐵道ノ難波停車場ヨリ梅田停車場ニ通スル幹線街路ニ一部トス	
		第二百二十二号線	築港ドック裏手ニ沿ヒ市有地ト民有地ノ境ニ通ス	第百〇七号線ニ全ジ	
		第三十號線	南濱法社ノ西ニ於テ第百五拾號線ノ北端ニ起リ秀、野木西島常吉ノ新田ヲ経過シ海岸ニ至ル		
		第五拾參號線	鶴橋村字木野ノ西北ノ郡界ニ起リ小橋高津梅ヶ辻、高津番町ヲ経過シ新架橋ニテ高津入堀川ヲ渡リ日本橋筋ト交叉シ難波新地二番町ヲ経過シ新架橋ニテ、難波入堀川ヲ渡リ大阪鐵道港町停車場前ニ至ル		
		第五拾四號線	鶴橋村字木野ノ西南ノ郡界ニ起リ桃山避難所ノ南ヲ経過シ第百七拾六號線（五等）以上本町筋ト交叉シ夫レヨリ天王寺警察署ノ南ノ筋ノ東端ニ至リ同筋ヲ経科、用シテ生國魂北向八幡社ノ南ヲ経過シ生國魂東門南、北筋ニ至リ全處ヨリ緩斜ノ為メ南方ニ屈曲シテ御藏跡、町ノ東端ニ於テ第百三拾二號線（三等）ニ至ル		
四等街路	東西線	第六拾四號線	生國魂神社ノ西南ニ於テ第百三拾二號線（三等）ニ起リ、御藏跡ノ旧道ヲ経利用シ日本橋筋ケク西ノ辻ニ至リ全、處ヨリ難波藏前ノ旧道街路ニ至リ全道ヲ経利用シ、難波西側町ニ至ル		
		第八拾七號線	三軒家大阪紡績會社ノ北ニ於テ木津川ノ西岸ニ起リ正西ニ、向ヒ新架橋ニテ尻無川ヲ渡リ第七十六號線（二等）ニ至ル	ゴシック体は原文では赤字による後補、ハ原文の改行位置、ハ原文の段落位置を示す。	

表 3 街路の各線（四等街路・南北線～六等街路）

[illegible]

追記（6 箇所）など、設計対象の変更を反映した校正を行っている。一方、四等以下の街路では「旧道ヲ利用シ」から「旧街路ヲ経」へと表現の修正が一貫して行われ（関連修正計 32 箇所）、設計対象の限定が意識されている。山口は確かに「市域全体の空間秩序の形成」⁸⁾^{注1)}を構想したと考えられるが、最終段階では設計内容と嘱託内容との関係を整理し「特ニ之ヲ設計ヲ為シタル旧街路ニ及ボシタル」所以ノモノハ實ニ以上ノ理由存スルヲ以テナリ」と追加事項が最低限必要不可欠なことを明確化し、実務的な訴求力を確保しようとした。このほか全般に亘る校正は「新架橋」の追記である（5 箇所）。山口は橋梁も設計対象と捉え^{注9)}計 56 本の新架橋を提案したが、嘱託内容を鑑みこれらを特記したと考えられる。三等街路第百号線東端の木津川には、一部を回転式^{注10)}とする鉄道線併用の「一大橋」を提案、敢えて「帆船通過ノ為メ」と追記し、当時の我が国では新奇であった事情^{注11)}を考慮した。旋回橋は街路と堀川の各ネットワークの共存を図る手段であり、山口の多角的検討を裏付けるものである。

5.2 街路設計の特質

街路の設計手法は 1)「街路ノ配置」、2)「街路ノ幅員」、3)「街路ノ地場」の各表題で説明され、1)では交通と集点、街路の方位、区画、旧街路の拡幅、2)では等級別の街路設計（断面・平面）、3)では土地造成、旧街路の改修、以上を提案した。点・線・面の各要素を組み合わせた多角的な設計手法である。1)では区画に関して「欧米各市ノ例ヲ参酌」し、2)では「欧米大都府ノ例」との対照で論を進めた。2)3)については山口が学んだ ÉCAM の教材・講義ノートに関連する学習内容を確認できる^{注12)}。山口は欧州で獲得した具体的知識を基礎に設計を行っており、例えば嘱託対象外の旧市街地の貫通幹線を「市有濱地」の改修で確保し用地買収の負担減を織り込んだ設計も、技術的な知識に裏付けられた提案であったと考えられる。

5.3 設計全体におよぶ特質

本設計は工業立地を強く意識したものだった^{5)注1)}。この点は続編で詳述する堀川の設計でより具体的に説明されるが、街路の設計でも留意されている。「街路ノ配置」における既存施設についての言及即ち「廣大ナル建築物乃チ各種ノ工場等ニ至テハ其一隅ヲ欠グモ全体ノ營業ニ影響ヲ及ホス^トアリ」とした箇所には ÉCAM での建築教育の影響を看取できる。元来 ÉCAM では、機械・冶金・化学・建設等の専門分野を網羅する総合的工学教育を行っていた。さらに講義や実習を通し、工場施設の組織・機構に関する詳しい知識を教授していた^{注13)}。山口は街路各線の説明で既存工場との位置関係に頻繁に言及しており、街路の配置で既存工場の存在を考慮したと考えられる。

都市計画理論の観点からは、本案が前提とした土地取得と事業経営の仕組みを検討すべきだが、本編の段階では詳述できない。他の施設計画、他事業との関連を視野に入れ、続編以降で改めて検討する。

謝辞

本研究には山口俊一様、松江歴史館、東京大学工学・情報理工学図書館のご協力を得ました。また前田記念工学振興財団、JSPS 科研費（基盤 B, 18H01617 代表:木方）、の補助を頂きました。記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 沖野忠雄,「従五位工学博士山口半六君略傳」,『山口博士建築図集』,発行年不詳（国立国会図書館所蔵, info:ndljp/pid/846382）
- 2) 長谷川堯,「フランスの理性を伝えた山口半六, 近江栄・藤森照信編,『近代日本の異色建築家』,朝日新聞社,1984

- 3) 石田頼房,『日本近代都市計画の百年』,自治体研究社,1987
- 4) 石田頼房,『日本近代都市計画研究』,自治体研究社,1987
- 5) 石田頼房,「日本の都市地域政策における地方の独自性と分権」,総合都市研究(74),東京都立大学都市研究所, p. 26, 2001. 3
- 6) 西川幸治他,『まちに住まう:大阪都市住宅史』,平凡社,1989
- 7) 大阪市計画局,『大阪のまちづくり -昨日・今日・明日-』,1991
- 8) 石田潤一郎,『関西の近代建築』,中央公論美術出版,1996
- 9) 荒井詩穂那・小沢朝江他,「山口半六の『大阪市新設市街設計』における公園計画とその背景」,日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.513-514, 2014
- 10) Kikata, J., Nakae, K., Japanese Students' Studies at the École Centrale des Arts et Manufactures in Paris in the 1870s and Its Impact on Urban Planning, *Proceeding of The 18th IPHS Conference*, 2018. DOI:https://doi.org/10.7480/iphs.2018.1.3884
- 11) 中村元編,『「日本最初の建築家」山口半六-資料・覚え書き-』,東方研究会,1980（初版）/1993（増補版）
- 12) 松江歴史館編集・発行『令和元年特別展・海将山口多聞を生んだ松江藩士山口家 -近代日本の礎となった人々-』,2019

注

- 注1) 西川(6)は山口が編入地域の道路設計のみならず旧市街地の貫通幹線道路整備、運河、臨海停車場、公園の整備を提案したこと、梅田駅と築港を結ぶ道路の重視、市街地拡張に備えた計画、以上の特徴を指摘した。石田頼房(5)は西川(6)に負いつつ、工業立地に当面していた大阪市の実態を指摘した。石田潤一郎(8)は大阪市計画局(7)に負いつつ、幹線道路や街路等級の設定、街路を基準とする地番表示等を挙げて欧州近代の街路設計手法を踏まえた計画とした他、水系の活用等歴史的な都市構成を生かした市域全体の空間秩序の形成を目指した点を評価した。石田頼房(4)も山口の実績をフランス・エコール・サントラル（以下 ÉCAM）での学習を踏まえ解釈する必要性を指摘した。この点は木方(10)も言及した。
- 注2) 山口半六編,『大阪市新設市街設計説明書』,1899,東京大学史料編纂所蔵
- 注3) 文献(11), p. 44. 両氏は山口半六の直系の御子孫である。
- 注4) 議案第四十三号、大阪市明治三十一年度歳入支出追加予算表中「第十五項街路設計費/大阪市ニ編入セシ元町村ニ属スル街路ノ設計費」と記載有。大阪市役所,『大阪市会史』,第三卷, p. 986, 1911
- 注5) 「工学博士 山口半六 大阪市街路配置設計ノ嘱託ス、設計完済ノ上報酬金トシテ金座千圓支給ス」明治三十一年七月九日 大阪市参事会
- 注6) 「答申書 大阪市新編入ノ地ニ新設セラルベキ街路設計ノ義御嘱託ニ依り別紙目録ノ通り図書ヲ具シ及提出候也 明治三十二年三月二十七日工学博士山口半六 大阪市参事会御中」,この答申書に続く「大阪市新設市街設計図書目録」は「新街路設計全図」(第一号)、「三千分ノ一切図」(第二号見取図~第十号)、「街路横断面図」(第十一号)、「街路交差点図」(第十二号)、「濱地利用法ノ図」(第十三号)、「川南街路別案」(第十四号~第十八号)、「町名番地考案図」(第十九~二十号)及び『大阪市新設市街設計説明書』(本稿 2.1 中②)、「『街路、堀川、公園早見』(同前③)を記載する。第一号は注7で閲覧可だが、他号は管見では見出されていない。
- 注7) 国立国会図書館所蔵 (info:ndljp/pid/845733)
- 注8) この点は西川(6)が本設計の特質として行った指摘注1)に通じる。
- 注9) 山口の ÉCAM での卒業設計課題は「橋梁 (Pont-Viaduc)」であった。Dénomination à l'année d'entrée/1876, *Archives de l'École Centrale des Arts et Manufactures de Paris (1820-2016)*, Archives Nationales France (AN) 20170270/897
- 注10) 山口がパリ市内その他の旋回橋を直接見た可能性は高いが、ÉCAM での学習機会としては山口の同期生の N.Schoulepnikoff が課外実習で調査したオランダ・フェルゼン(Velsen)の旋回橋の図面が優秀作品集に収録されており、彼がこれを見たことは確実と思われる。なお古市公威は本作品集を所有していた。ÉCAM, *Portefeuille des travaux de vacances des élèves, année 1878*, Paris : J. Dejeu & Co., 1879 東京大学工学部社会基盤工学科所蔵・古市公威文庫 T21729,及び AN 20170270/1639
- 注11) 現存最古の例・山陽鉄道の和田旋回橋は1899年12月に完成した。
- 注12) 山口の単位取得学期の A. Boutillier による土木学(Cours de Travaux Publics)の図集に道路断面の実例集 (*Profils de chaussées*) の掲載がある。同講義では第 6-14 講で土地造成(terrassment)、第 15 講でのり面・築堤(talus)、第 16-18 講で道路(route)を講じている。Cours de Travaux Publics par M. Boutillier 1878-79, 東大古市公威文庫 J21(古市公威の自筆ノート),K03(図集),及び AN 20170270/2736 (A. Hugué の自筆ノート), AN 20170270/2735(図集)
- 注13) 山口の在籍学期の É. Muller による民生建築講義(Cours de Constructions Civiles)では、第 43-45 講で倉庫(entrepôts)、ドック(docks)、紡績・織物工場(filatures et tissages)などが課題予備学習 (études préliminaires d'un projet) として講じられており、図集にも同様の内容を確認できる。Cours de Constructions Civiles par M. Muller 1877-78 東大古市公威文庫 J17(古市公威の自筆ノート),M08(図集),及び AN 20170270/2976 (A. Hugué の自筆ノート),ÉCAM の講義内容の分析は稿を改めたい。なお山口は ÉCAM 卒業後 Muller が経営したタイル・煉瓦工場で研修を行った。文献(1)

[2020 年 10 月 6 日原稿受理 2020 年 12 月 14 日採用決定]